

「僕の名前はマッキーチャンじゃない。僕の名前はクリスマスだ。」：  
『八月の光』における人種境界線と自己磔刑

森本 奈理

William Faulknerの*Light in August*（『八月の光』、1932年）において、我々読者がJoe Christmasの人種的アイデンティティー、「彼が白人なのか、それとも黒人なのか」、について知ることは不可能だとされてきた<sup>1</sup>。たしかに、「確たる『私』などというものは存在しない」というポストモダンの言説に取り巻かれている現代の読者が、ジョーの人種的アイデンティティーについて判断を保留することは問題なく正しいことだが、このポストモダンの認識を、作品の語り手、すなわちJeffersonの住民、の判断にまで拡大させることはできない<sup>2</sup>。1930年前後のアメリカ南部に生きていた「語り手（たち）」が、ジョーを我々とは異なる観点で見えていたとしても不思議はないし、また、事実、そうであったと考えられる<sup>3</sup>。当時のアメリカ南部という文脈においては、ジョーは黒人に他ならないし、その事実をふまえて、ジョーが黒人としていかにふるまったかについて、この論考では見ていくことにする<sup>4</sup>。

### I: What Signifies Joe Christmas?

議論を始めるにあたって、Faulknerが『八月の光』を書いた時代のアメリカ南部の人種をめぐる状況について確認しておきたい。北部主導の南部再建計画が失敗すると、南部諸州は、Jim Crow lawsとよばれる、反動的な法案を次々と可決しているように、白人・黒人の区別は本質的であった。ジム・クロウ法による人種隔離政策として、黒人投票権の制限、異人種間結婚の禁止、公立学校・鉄道車両・バスでの分離といったものがあるが、ここでは、異人種間結婚の禁止という問題を取りあげておくことにする<sup>5</sup>。実は、異人種間結婚の禁止は、北部でも実施されているのだが、もちろん、南部のほうが、はるかに徹底的でかつ長きに渡って存続した。異人種間結婚を無効とする裁判で最も有名なものが、1883年の*Pace v. Alabama*で、これは1967年の*Loving v. Virginia*で否定されるまで、異人種間結婚を罰する裁判のガイドラインだった<sup>6</sup>。この類いの裁判では、「白人・黒人の区別は、神・自然の作用によるもので、両種の分離こそnaturalで、異人種間結婚はunnaturalだ」というロジックが成立していた（Saks 65-67）。

このような人種隔離政策を施行するためには、白人・黒人の区別、すなわち、「白人とは何か」「黒人とは何か」という定義、を明確にしておく必要がある。ところが、こ

の「カラー・ライン」を引く作業は、相当にやっかいなものである。ボーダーライン上の人々をどちらの人種に分類すべきか、という難問が、常についてまわるのである。「ボーダーライン上の人々」とは、この論文の主人公であるジョーのような、「白い黒人」のことである。ジョーは、白人に見えるが、黒人の血が混じっているらしい。容易に想像できることだが、ジョーのようなケースでは、「カラー・ライン」は、かなり恣意的に引かれることになる。この場合もやはり、法廷においては、どのようなプロセスで人種の決定がなされるのかを見てみたい。

第一のプロセスでは、被告の *visible* な特徴に注目することになる。もっとも有力な手がかりは、「肌の色」であり、肌の色が *brown* や *yellow* であれば、黒人の血が混じった「混血」、すなわち「黒人」、に分類される。その他の手がかりとしては、髪の毛の形状・顔の輪郭・指の爪、といったものがあつた。ただし、本人の外見的特徴だけでは、「白い黒人」を「白人」に分類してしまうことになるので、これだけで判断できない場合には、証人喚問が行われる。証人は、たいていの場合、友人や隣人で、被告の先祖の外見的特徴、被告の交友関係や評判といったことについて証言することになっていた。

次のプロセスは、「血」による人種の定義である。州によっては、より客観的にかつ迅速に「カラー・ライン」を引くために、これが法律で明文化された。ふつう、「8分の1」以上黒人の「血」を持つ者が黒人とされたのだが、最も厳しいものとしては、*one-drop rule* として有名な、「1滴」でも黒人の「血」が混じれば黒人と見なされる、というものがあつた。（『八月の光』の舞台、*Mississippi* では、1917年に後者が採用された。）もちろん、現代から見れば、人種に固有の「血」などというものが存在しないことは明白であり、「血」というものは、「フィクション」「メタファー」である。そうであるように、「血」は *invisible* なので、この定義も、結局、外見的特徴によるそれと同じように、絶対的なものではなかった。家系図をさかのぼり、曾祖父母の代まで人種を把握できている場合ならまだしも、ふつう、この要求に答えることはかなり難しいと言わざるを得ない。このように、「血」による定義もあいまいな場合、判事によって恣意的な判断がなされるわけだが、その根拠は、外見的特徴に置かれることになりがちなので、ここには、「堂々巡り」のジレンマがある。

要するに、ボーダーライン上のケースに見られるように、人種は構築主義的なのだが、当時（の南部）にあつては、何があろうとも、本質主義を維持しなければならないので、このようなジレンマを抱え込んでしまうのである。

ここまでは、具体的事例を伴わない一般論であつたが、ここからは、2つの文学テキストを例にとり、人種的アイデンティティー決定のプロセスの問題点を見ていきたい。1つめのテキストは、*Edna Ferber* の *Show Boat*（『ショー・ボート』、1926年）であり、これは比較的容易に司法当局（保安官）が判断を下しうるケースである。そして、もう1つは、言わずと知れた、*Faulkner* の『八月の光』であり、これは、考えうる限り、判断が最も難しいケースである。結論を先取りすれば、*Faulkner* は、この最も難しいケースを呈示することで、人種的アイデンティティー決定のプロセスの「本質」を

暴き出しているのである。

まずは、『ショー・ボート』から見ていこう。舞台は、Mississippi川を航行するショー・ボート上で、事件は、この船が公演のために Lemoyne, Mississippi にやって来たときに起こる。Steve BakerとJulie Dozierは、劇団の主演俳優・女優で夫婦であり、ジュリーは自らが黒人である事実を隠し、白人としてふるまっている。(ジュリーは黒人を母に持つ。)そして、この停泊地こそジュリーの生まれ故郷であり、昔なじみの人々との再会を避けるために、彼女は仮病を使い、公演を中止に追い込もうとしている。(スティーブは、公演の告知板に掲げられたジュリーの写真を盗むことで、この方面からもジュリーの正体が暴かれないように取りはかっている。)しかし、ここに、密告を受けた保安官Ike Keenerが乗り込んでくる。密告をしたのは、Peteという、ジュリーに一方的に想いを寄せる男で、再三ジュリーに言い寄った罪の罰として、スティーブに辱めを受けたことを恨みに思い、復讐を誓っていた。保安官がやってくることを事前に察知したスティーブは、劇団員の目の前で、ジュリーの手ひらにナイフで傷をつけ、傷口からほとばしる血をすする。スティーブは、金髪碧眼の白人なのだが、異人種間結婚を禁じようとする保安官に対して、次のように申し開きをする。

“You wouldn’t call a man a white man that’s got Negro blood in him, would you?”

“No, I wouldn’t; not in Mississippi. One drop of nigger blood makes you a nigger in these parts.”

“Well, I got more than a drop of—nigger blood in me, and that’s a fact. You can’t make miscegenation out of that.”

“You ready to swear to that in a court of law?”

“I’ll swear to it any place. I’ll swear it now.” Steve took a step forward, one hand outstretched. “I’ll do more than that. Look at all these folks here. There ain’t one of them but can swear I got Negro blood in me this minute. That’s how white I am.” (145)

スティーブは、今しがた飲み込んだジュリーの血を根拠に、彼自身も黒人の「血」を持つ、と言い張る。ここは、one-drop ruleを逆手にとった、「法廷」のパロディーであるとも考えられる。もちろん、スティーブが黒人ならば、ジュリーとの結婚は、法律的に正しいものとなる。引用した場面の後には、証人の証言が続く。さすがにスティーブの言葉は信じられない保安官に対して、義理人情に厚いWindy McClainが、「スティーブには、黒人の血が混じっている」と証言する。ウィンディーと保安官は昔なじみの関係で、保安官はこの証言は信じるに足るものだとしぶしぶ認めることとなる。要は、ウィンディーの「スティーブは黒人である」という証言が、スティーブを黒人にするわけだが、このような証言が決め手になるのは、文学テキストに限ったことではなく、実

際の裁判でも頻繁にあったことである。このように、「カラー・ライン」は、かなり恣意的に引かれたのである。この事例を見れば、現代に生きる我々は、「人種とは構築主義的である」と結論づけるだろうが、この判断は、次の事例を分析し終えるまで、一時保留にしていきたい。

それでは、次に、『八月の光』をひもといて、ジョーの人種的アイデンティティーを、法廷の手続きにしたがって、決定していこう。まずは、ジョーの外見の特徴だが、肌は、「羊皮紙色」と形容されるように、白い肌である。ジョー自身は、肌の色とともに頭髮の形状も黒人を示唆していると考えているが、これとても確かな証拠ではない。さらに、ジョーの交友関係や評判ということになると、ほぼ完全に謎につつまれており、これらの観点から、ジョーの人種的アイデンティティーを決定することは不可能である。また、「ふるまい」という観点からしても、Mottstownの住民いわく、「黒人らしくは見えない」とのことである。

外見からジョーの人種的アイデンティティーを決めることはできないので、今度は、「血」を問題にしてみよう。Jeffersonにやってきた当初のジョーは、完全な「孤児」であり、この町の「アウトサイダー」である。物語の後半では、ジョーの出生の秘密が明かされ、ジョーは、Hines夫妻の一人娘 Millie を母に持ち、母方は白人の「血」であることが明かされている。対して、ジョーの父方のそれに関しては、謎に包まれている。ジョーの父は、行きずりのサーカス団員で、自称「メキシコ系」（の白人）である。そして、この「メキシコ系」という人種のカテゴリーこそ、もっともあいまいなものである。「メキシコ系」を名乗ることで意味せんとしているのは、スペイン系の白人だということだが、多くの場合、「メキシコ系」は、スペイン系とインディアン、あるいは黒人との「混血」である<sup>7</sup>。要するに、「非白人」にカテゴライズされるべき人物であったとしても、「メキシコ系」を名乗ることで、白人・非白人の間の「グレー・ゾーン」にまで持っていくことはできるというわけである。あとは、やはり、これまでと同じことが繰り返されるのみである。白人に認定される「メキシコ系」もいれば、そうでない人たちもいる、ということである。ジョーの父の「血」に関しては、黒人の血が混ざっている、という情報もあるのだが、これはあくまでも推量・願望のレベルにとどまるので、この時点ではまだ絶対的な根拠として取りあげるべきものではない。非常に残念なことだが、「血」のレベルからも、ジョーの人種的アイデンティティーを決めることはできないのである。

ここまでの経過を考慮すると、ジョーはむしろ白人にカテゴライズされそうな証拠がそろっている。父のあいまいな人種的アイデンティティーも、ジョーの肌の色から判断すれば、遡及的に「メキシコ系」白人と認定される可能性が高そうである。しかし、それにもかかわらず、ジョーは最終的に黒人になってしまう。いや、正しくは、アメリカ南部という社会に生をうけたときからずっと、ジョーは黒人であったのだ。なぜか。この疑問の解答にこそ、Faulknerが『八月の光』でえぐり出そうとした、アメリカ南部人種観の「本質」が横たわるのだ。

ジョーの人種的アイデンティティーの最終的判断を要約しているのが、Joe Brownと保安官の以下のやりとりである。

'I'm talking about Christmas, [. . .]. He's got nigger blood in him. I knewed it when I first saw him. But you folks, you smart sheriffs and such.'

[. . .]

'A nigger,' the marshal said. 'I always thought there was something funny about that fellow.' (470-71 emphasis added)

これは、Joanna Burden 殺害犯にかけられた懸賞金を目当てに、ブラウンが警察署に出頭してくる場面だが、ジョーをすんなり売り渡すことができるというブラウンの目論見は外れて、逆に彼自身がジョアナ殺害犯に仕立て上げられそうになる。このピンチに備えて、ブラウンが用意しておいた「切り札」が、ジョーは黒人である、という証言である。そして、事実、この切り札によって、形勢は一気に逆転し、ブラウンは嫌疑を完全に晴らす一方で、ジョーは白人女性をレイプ・殺害した黒人の悪党に格下げされるのだ<sup>8</sup>。

「ジョーは黒人である」と断定するブラウンの根拠は、「かつてジョー自身からそれを聞いた」ということだが、ブラウンは、それを聞く以前にすでに、ジョーの人種的アイデンティティーについて知っていた、と主張する。この主張は、おそらく、ブラウン一流の虚勢であろうが、実は、この虚勢の中にこそ、人種的アイデンティティーを決定する究極の要因が含まれている。南部人なら、(いくら肌の色が白かろうと) 黒人を見ればそれと分かる。ある人が黒人であるのは、他の人が彼・彼女を黒人だと考えるからだ、ということである。(先程、法廷でのプロセスを説明しているときに、わざと触れなかったのだが、法廷で人種判別をするときに召喚される証人はほとんどが、人種の専門家ではなくて、ずぶの素人である。要するに、その程度のことなら誰でもできる "Most Americans are sure *they know race when they see it*" と当時の人は信じていたのだ (Pascoe 111 emphasis added).) この自明のロジックを忘れてしまっていた負い目もあって、それまでブラウンを疑っていた保安官も、あっさりとブラウンが本当のことを言っている、と認めてしまう。

「あいつはどうも黒人らしい、という直感が、その人の人種を決定する」というロジックは、現代人の目からすれば、すぐれて構築主義的なロジックに見えるかもしれない。ただし、この命題のキーワードは「直感」という言葉である。ある人の人種を決定する究極の根拠が、「文化」「ふるまい」ではなく「直感」である、と言う場合、このカテゴリーの仕方は、限りなく本質主義に近づく。ここで、Walter Benn Michaels の "Autobiography of an Ex-White Man" を見てみよう。Michaels は、「ある人をユダヤ人にするのは、他の人が彼・彼女をユダヤ人だと考えるからである。」「ユダヤ文化を

共有しない同化ユダヤ人もユダヤ的だと見なされつづけるので、文化が同化ユダヤ人をユダヤ的に見せているのではない。よって、ユダヤ人差別主義者が同化ユダヤ人をユダヤ人だと断じるとき、彼（ユダヤ人差別主義者）は、文化ではなく *essence*（本質）を問題にしているのだ。」という Jean-Paul Sartre の論考を敷衍して、“Therefore, racial identity—unlike religious or professional identity—cannot be understood simply as the ‘performance’ of a ‘role’” と書いている（139-40）<sup>9</sup>。『八月の光』のジョーは、まさに Michaels が言うところの、「元白人」である。しかも、生れながらの「元白人」である。ジョーの人種的イニシエーションは、白人用の孤児院で、だった。子供たちはだれに教えられるでもなく、ジョーを「黒人」とののしりはじめる。ジョーを養子縁組にやってきた McEachern は、ジョーの人種的アイデンティティーについて、うすうす何か感づいていながら、そのことを院長に聞き出せずにいる。（白人を黒人だということは最大級の侮辱であり、ジョーのいるのが白人用の孤児院である以上、そのような問いかけをして、院長自身の判断力にまで「けち」をつけるようなことは、敬虔なクリスチャンであるマッキーチャンにはできない。）そして、最後に、ブラウンと保安官。保安官は、「どうもあいつにはくさい（funny）ところがあると思っていたんだ」と、ふと漏らす<sup>10</sup>。これらの「直感」こそが、ジョーを黒人にするのだ。

このパートの結論に入ろう。『八月の光』において、Faulkner が呈示しようとしているのは、「カラー・ライン」は恣意的に引かざるをえないがゆえに人種は構築主義的である、というポストモダンの理論的蓋然性ではなくて、「カラー・ライン」は恣意的に引かざるをえないにもかかわらず（依然として）人種は本質主義的である、という逆説的事実である<sup>11</sup>。この文脈における Faulkner のふるまいは、徹底してリアリストのそれである。この Faulkner のふるまいの証拠として、2つの有名な場面を挙げておこう。1つは、「弁護士」Gavin Stevens が明らかにする、悪名高き「人種理論」である。スティーブズの人種理論は、ジョーの行動を、彼のなかにある「白人の血」と「黒人の血」の観点から説明するものだが、なるほど著しくドグマ的な分析で、ジョーの本質を完全に見誤っている。しかし、スティーブズは弁護士であるだけに、当時の法廷のディスコースは完全に押さえている<sup>12</sup>。法廷は、「血」というメタファーを管理するシステムである。もう1つは、ジョーの死体からほとばしる「黒い血」である。この場面を報告しているのが Jefferson 市民である以上、すでに完全に黒人としてのレッテルを貼られてしまったジョーの血が、「黒人の血」に見えたとしても、何もおかしくはない<sup>13</sup>。

ところで、白人は、なぜこのように、人種の差異を絶対視し、白人・黒人の異人種間結婚を禁じようとするのか、について疑問を持つ向きもあり、この問いに対しての答えにもさまざまなものがあると思うが、私としては次の事実を呈示するにとどめたい。『八月の光』のちょうど前に書かれた *Sanctuary*（『サンクチュアリ』、1931年）において、Miss Jenny は（incest の欲望を持っている Horace Benbow に対して）このような発言をしている：“I’ll declare, a male parent is a funny thing, but just let a man have a hand in the affairs of a female that’s no kin to him. . . . . What is

it that makes a man think that the female flesh he marries or begets might misbehave, but all he didn't marry or get is bound to?" (293)。男性は、自分の身内の女性に関しては、その貞操を信じているにもかかわらず、他所の女性に関しては、みんな淫乱だと思い込んでいる、といった内容であり、まさに **Quentin Compson** の（裏切られた）信念そのものであるが、この個人レベルでの感慨を集団の無意識にまで引き上げると、「白人男性は、白人女性の貞操を信じているが、黒人女性はみんな淫乱だと思っている」「白人は貞淑ゆえに繁殖力が弱いが、黒人は性的に奔放で繁殖力が強い」という命題になる<sup>14</sup>。このロジックは、両大戦間期に流行した **nativism** のロジックにそれほど遠くない。**Michaels** の *Our America* によれば、第一次大戦は白人同士による殺し合いであり、戦後、「消えゆく北欧系アメリカ人」という言説が流行った (29-40)。ただでさえ、繁殖力の弱い白人種が、戦争で数を減らしてしまったのだから、このままいくと、どんどん雑婚が増え、純粋な白人種というものが駆逐されてしまう。そうならないためにも、白人種は「純血」を守るために、一致団結して敵にあたるべきだ、というわけである。ロスト・ジェネレーションの作家に顕著に見られる「白人男性性喪失」の言説とも合わせ鏡になっているが、ただ、この問題に関しては、ここでこれ以上深入りするつもりはない。

## II. What Does Joe Christmas Signify?

ここまでの作業は、いわば、外堀から埋めていってジョーを追い詰め、彼に黒人のレットルを押しつける作業だったが、ここからは、生まれたときから黒人であったジョーは、社会に対し何を言わんとしていたのか、という正反対のベクトルから、ジョーを記述していきたい。これまでの作業は、さしずめ、**What signifies Joe?** という問いに答えようと骨折ってきたのだが、ここからの作業は、**What does Joe signify?** という問いに答えようとしていくものである。前半の客体を後半の主体に持ってくる時点ですでに矛盾が生じているのだが、この2つの問いは、ジョーという「コイン」の両面であり、むしろ矛盾なく通約することは不可能である<sup>15</sup>。矛盾を避けようとするれば、どちらかのパートを削る「くさいものにはふた」という戦術を取るしかないのだが、もしもこのような欺瞞的態度を取ったとすれば、ジョーという徹底的に人生を真摯に生きた偉人に対して、私は顔向けができないことになってしまう。

これまで述べてきたように、ジョーは黒人である。少なくとも、当時の南部人からすれば。この認識が、「存在」同様に、謎に包まれているとされてきたジョーの「ふるまい」を解釈するにあたって、どのような影響を及ぼすのか。ここからは、このことについて考えていきたい。そうするに先だって、「南部における黒人のイメージ」について、2つのタイプを確認しておきたい。この2つのイメージがあるのは、南部だけに限らないが、それでも、南部で最も流行したことは確かである<sup>16</sup>。

まず1つめは、「白人に従順な黒人」というタイプである。このタイプを代表するの

が、*Uncle Tom's Cabin* (『アンクル・トムの小屋』、1853年、舞台はKentucky)の主人公Uncle Tomである。アンクル・トムは黒人奴隷であるが、白人の主人に対して「滅私奉公」する人物であり、敬虔なクリスチャンである。アンクル・トムは非常に寛容な精神の持ち主であり、白人・黒人を問わず、仲間のために自分が犠牲になることを厭わない。おそらくは、ばくちで作った借金を清算するために、主人Shelbyが彼を売ることに決めたときでさえ、愛しい家族と離れ離れになってしまうにもかかわらず、「自分が犠牲になることで、他が全て丸く収まるのなら」と、アンクル・トムはこの計画をすんなり受け入れる。

もう1つは、「白人に反抗する黒人」である。「反抗」には、「北部への逃亡」「武装蜂起」など様々な形態があるが、ここでは、支配者に君臨する「白人男性」からして、個人レベルで最も脅威な存在である、「白人女性と寝ようとする性的放縦な黒人男性」を想定している。要するに、「異人種混交」というタブーを犯す存在である。このタイプの典型を誰にとるのかはなかなか難しいが、映画*The Birth of a Nation* (『国民の創生』、1915年、舞台はSouth Carolina)のSilas LynchでありGusである<sup>17</sup>。リンチは、白人女性Elsie Stonemanをレイプしようとするが、すんでのところKKK団が到着し、レイプは未遂に終わる。ガスは、白人女性Flora Cameronをレイプしようとし追いかけてますが、逃げ切れないと観念した彼女は、岩場から飛び降り自殺をする。ジョーよりも後発の人物でいえば、著書*Soul on Ice* (1968)で白人女性を「欲望の対象」として“The Ogre”と呼び、現実でも白人種への怒りから彼女たちへのレイプを繰り返したEldridge Cleaver (Arkansas生まれ、ちなみにジョーもArkansas生まれである)が、それにあたるだろう(6)。

それでは、この2つのタイプのうち、白人から見て、より「存在感」があるのは、いったいどちらなのだろうか。アンクル・トムは、悪く言えば、抑圧者である白人に「こびへつらう」黒人であり、敬虔なクリスチャンであるがゆえに、来世に期待する傾向が強く、現実に目の前にある「不正」に対しては、見て見ぬふりをしているといってもいい。現世を否定するアンクル・トムは、(Simon Legreeのような「悪党」は除いて)白人からしてみれば、御しやすい存在で、当然のことながら、存在感は薄くなる。アンクル・トムは、聖書の教えに従うことで、知らず知らずのうちに、社会的には死んだ「幽霊」になり、自らをinvisibleな存在に追いこんでいるのだ<sup>18</sup>。実際に、『アンクル・トムの小屋』出版後、時間が経つにつれ、アンクル・トムは黒人からますます悪いイメージでとらえられるようになっていった。20世紀後半の公民権運動の時代にもなると、アンクル・トムは、白人男性と「できて」いる存在、すなわち、「女性のようなよなよとした、ホモ・セクシュアルの傾向のある人物」だとまで見なされるようになる<sup>19</sup>。

それに対し、リンチやガスのような「白人女性と寝ようとする黒人」は、抜群の存在感を発揮する。2人は、そのような欲望を抱いたせいで、KKK団によって処刑される。(ガスに至っては、処刑後、「去勢」される。)要するに、白人女性と寝た、もしくは、



そのような欲望を持ったとうわさされる黒人は、私刑の対象として、にわかに白人社会で存在感を持ち始めるのだ。リンチやガスのような悪党は言うに及ばず、それまでは社会の健全分子として存在感皆無であった（すなわち「アンクル・トム」的な）黒人さえもが、「白人女性をレイプした」といううわさを立てられることにより、突如、注目的になるという事例のなかで、最も人口に膾炙しているものが、Harper Leeの*To Kill a Mockingbird*（『アラバマ物語』）に登場するTom Robinsonである。『アラバマ物語』が出版されたのは1960年であるが、物語自体は、語り手が子供時代の出来事を回想するものであり、ロビンソン事件はちょうど1930年代半ばのAlabamaで起こっている。ロビンソンは、貧乏白人のMayella Ewellに同情し、彼女の力仕事を代わりにやってあげる善良な心の持ち主である。19才の女性であるメイエラは、亡くなった母の代わりに、家事をとりしきり、父・男兄弟の面倒をみている。19才とはいえども、貧乏白人の世界では、女性はもっと早くに嫁に行くものなので、メイエラは、いわゆる「婚期を逃した女性」であり、このあと彼女が結婚できる可能性はない<sup>20</sup>。もちろん、彼女とて、人並みの性欲はあるのだが、それを満たす手段が彼女にはないのだ。このような状況の下にあるメイエラのところへ、ロビンソンはやってくる。事件は8月21日に起こる。家族がみな出払っているのを利用して、メイエラは室内の扉を直してほしいと、ロビンソンを家の中へと誘い込む。そして、メイエラはロビンソンを誘惑するのだが、ロビンソンは驚いて逃げようとする。この騒ぎを目撃したメイエラの父Bobは、娘を殴りつけるのだが、一家の名誉を守るために、娘と口裏をあわせて、ロビンソンがメイエラをレイプしようとした、と言い張る。ロビンソンは無実の罪で告発されているのだが、彼は黒人であり、誰も彼の言い分に耳を貸さない。本来ならば、ロビンソンは私刑に処されるころなのだが、Finch一家がうまく立ち廻り、ロビンソン事件は法廷へと持ち込まれる。そこで、ロビンソンを弁護するAtticus Finchは、徹底的にボブの嘘を暴いたあと、次のように演説をぶつ：“She [Mayella] was white, and she tempted a Negro. She did something that in our society is unspeakable: she kissed a black man. Not an old Uncle, but a strong young Negro man. No code mattered to her before she broke it, but it came crashing down on her afterwards” (231-32)。にもかかわらず、ロビンソンは「有罪」宣告を受けて絶望し、護送中に逃亡をはかりその場で射殺されてしまう<sup>21</sup>。

要するに、ある意味で「アンクル・トム」的な存在感ゼロのロビンソンが、うわさがたつやいなや、私刑の対象として命を狙われ、最終的には、法廷の場で世間の人々の大注目を浴びることになるのだ。もちろん、ロビンソンとしては、注目などされずに一生を送りたかったことだろうが、この白人男性の不安を逆用すれば、普段は白人から一顧だにされないinvisibleな黒人であっても、にわかにvisibleな存在になることができるのだ。

そして、このロビンソンのようなケースがあることを、Faulknerは知っていたのである。『八月の光』出版よりも前の、1931年1月に、Faulknerは“Dry September”

（「乾燥の九月」）という（傑作）短編を発表している。先に述べたロビンソン事件と「乾燥の九月」とでは、後者において、問題の黒人男性が私刑で殺されること、問題の白人女性が「貧乏白人」ではなく「中流階級」に属すること、といったディテールを除けば、2つの事件の概要はほぼ同じである。Jeffersonの健全な市民である黒人のWill Mayesは、完全に婚期を逃した白人女性Miss Minnie Cooperをレイプしたといううわさを立てられて、その疑惑を否定しているにもかかわらず、私刑を受け銃殺されてしまう。うわさの出所は、おそらく、ミス・ミニー本人であり、自意識の強い彼女は、自分がまだまだ性的魅力を備えていることを証明しようと、ウィルを犠牲に、捨て身の策に打って出たようである<sup>22</sup>。南部の白人であるならば、白人の証言を信じるのが、社会的に正しいふるまいであるので、Hawkshawのようにウィルを弁護する白人は、“You mean to tell me [. . .] that you’d take a nigger’s word before a white woman’s? Why, you damn niggerloving—”と罵られるのである（*These Thirteen* 265）。ただし、ここでもやはり、強調点は、これまで社会的に存在感皆無であったウィルが、うわさを立てられることにより、注目を一身に集めることになった、という事実にある。

南部における「黒人」をめぐる2つの大きな言説を確認したので、『八月の光』におけるジョーのふるまいの分析に移りたい。ジョーは、物心ついた頃から常に「黒人」のレッテルを貼られてきたので、白い肌を持つにも関わらず、事あるごとに、黒人にidentifyしようとする。しかし、これまで見てきたように、黒人にも2つのタイプがあるので、黒人にidentifyしようとするならば、ジョーはどちらか1つのタイプ、あるいは両者のグレー・ゾーンのいずれかを選ぶ必要がある<sup>23</sup>。結論から言えば、ジョーが選ぶのは、Cleverのような「白人と敵対的な黒人」「世のかよわき白人女性をレイプする野獣同然の黒人」のほうである。『八月の光』のジョー・プロットのキーワードの1つがoutrageだが、この白人・黒人の間に常についてまわる「怒り」を栄養分として育った人物が、ジョーなのである。要するに、南部白人至上主義社会の危険分子としてふるまうことをジョーは選んだのであり、最終的には、危険分子として社会から排除されてしまうのだが、実は、「排除される」こと自体が、ジョーのもくろみの一部であったのだ<sup>24</sup>。しかし、ここではこれ以上結論を急がず、ジョーの人生の軌跡をもっと克明に追うことにする。

このように、ジョーは、「怒り」を行動原理に据える「白人と敵対的な黒人」なので、アンクル・トムのような、「アガペー」を行動原理に据える「白人と協調的な黒人」には我慢がならない<sup>25</sup>。「アガペー」とは、キリスト教の友愛精神の根幹をなしており、これこそが、アンクル・トムのような、白人の不正にも異議申し立てをしない軟弱な黒人を生み出し続けるシステムでもあるので、ジョーの「反キリスト」の態度は徹底している。狂信的な養父マッキーチャンが孤児院の院長を前にして「クリスマスという名前は冒瀆的で改姓しなければならない」と漏らすと、“My name aint McEachern. My name is Christmas”と感じている事実象徴されるように、ジョーは子供のときからすでに「反キリスト」の感覚を養っている（506）。同じように、マッキーチャンの下

で暮らし始めても、ジョーは、何度鞭打ちの罰を受けても、キリスト教の「カテキズム」を暗記しようとしな。そして、初めてこの屈辱を受けた8才のある日曜日に、「あの日に俺は一人前の人間になった“*On this day I became a man*”」と彼は回想している(507)。

さらなるジョーの「反キリスト」のエピソードは、ジョアナとの関係の第三段階に訪れる。この最終段階では、ジョアナはジョーをアンクル・トムのような従順な黒人に仕立て上げようとする。彼女の言い分は、ジョーは黒人大学に入学して法律を学ぶべきであり、卒業後は弁護士としてジョアナの仕事を引き継ぐ、要するに、他の黒人を向上できるようにするべきだ、というものである。この時期のジョアナは、あたかも女性版「狂信者マッキーチャン」であるかのように、ダイアログできる類いの人物ではなくなっており、「会話」の最後には祈りだし、ジョーにもひざまずき祈ることを強要するのである。もちろん、ジョーは、アンクル・トムやBooker T. Washingtonのような黒人になる気はないので、ジョアナの要求をきっぱりとはねつける<sup>26</sup>。

最後の「反キリスト」エピソードは、ジョアナ殺害後の一時的逃亡中に発生する。ジョーは、黒人教会に押し入り、そこで進行していた礼拝集会をめちやくちやにした挙句、説教壇に上がり神を冒瀆し始める。繰り返しになるが、「アガペー」の必要性を説く黒人教会こそが、社会的にはすでに死んでいる「幽霊 (*invisible*) 黒人」を大量に生産し続ける「制度」であり、ジョーはこの本質を見抜く洞察力を有しているのだ。面白いことに、茂みに逃げ込んだ黒人たちの姿は「見えない」のに対し、教会の入り口に立つジョーは、夜の暗闇のなかでも「自分の存在を誇示する」「*visible*な存在である」ために、たばこに火をつけそれをゆっくりと吸い始める。

この対比を踏まえていると、有名な「黒人集落からジョーが恐怖で逃げ出す」場面も、これまでとは若干異なった解釈ができる。

Then he found himself. Without his being aware the street had begun to slope and before he knew it he was in Freedman Town, surrounded by the summer smell and the summer voices of *invisible negroes*. [. . .] He began to run, glaring, his teeth glaring, his inbreath cold on his dry teeth and lips, toward the next street lamp. Beneath it a narrow and rutted lane turned and mounted to the parallel street, out of the black hollow. (483 emphasis added)

もちろん、*invisible negroes* という表現の意味するものは、文字どおりには、黒人は室内にいるから、その存在は街路から見ることにはできない、ということなのだが、この記述を「アンクル・トムのような軟弱な黒人」一般にまで拡大して、「そのような黒人は社会的に不可視だ」とジョーが解釈しているととらえるのは、うがちすぎた読み方になるのだろうか<sup>27</sup>。

同じく、有名な「童貞喪失のために呼んだ黒人女を殴りつける」場面においても、ジョーの怒りは、ミソジニーからくるものというよりは、黒人女性と寝る「(南部的文脈での)社会的に正しいふるまい」をする黒人男性への反抗心からくるものと解釈するほうがよいように思われる<sup>28</sup>。

His turn came. He entered the shed. It was dark. At once he was overcome by a terrible haste. There was something in him trying to get out, like when he had used to think of toothpaste. But he could not move at once, standing there, smelling the woman smelling the negro all at once; enclosed by the woman, the negro and the haste, driven, having to wait until she spoke: a guiding sound that was no particular word and completely unaware. *Then it seemed to him that he could see her—something, prone, abject; her eyes perhaps.* (514 emphasis added)

この場面で、自分の番が回ってきたジョーは、小屋の中に入るがそこは暗く、当初、目的の女性の姿は見えない。女性の臭いと同時に黒人の臭いも感じたジョーは、「吐き気」をもよおす。引用部の最後は、(推量表現を駆使した)非常にあいまいな記述であり、ジョーが黒人の姿を知覚したのかどうかは、謎のままである。このあと、恐怖を感じたジョーはめくらめっぽうに黒人を殴りつけ、仲間に押さえつけられているうちに、その黒人は逃げてしまう。ここでは、先に見た引用部のように、invisible という表現はないものの、それでもやはり、黒人はinvisible だったのだ。長じては、アメリカ北部 Detroit で、ジョーは黒人女性と夫婦のように暮らす経験もするのだが、そのときでもやはり、黒人と寝ることに違和感を抱いている。

ジョーの性癖を垣間見たところで、結論に移ろう。ジョーは、白人女性と寝ていることを周知の事柄にすることで、そうでなければ「ただの黒人」としてinvisible な自らの存在を、排除すべき脅威の存在としてvisible なものに変換しようと、この世に生を受けたときからずっと願ってきたのだ<sup>29</sup>。そうでなければ、なぜ、ジョアナを殺した後、一旦は逃げ出したジョーが、彼女の家に火をつけるために戻ってこなければならなかったのか。殺人の証拠隠滅のためなのだろうか。そんなはずはない。ジョアナも Jefferson ではアウトサイダーであり、彼女の家を訪れる白人は一人もおらず、ごくたまに黒人が勝手口に来てくるのみである。その家の黒人小屋に間借りしていたジョーは、ジョアナの交友範囲をつぶさに知っていた。犯罪の露見を恐れたのなら、むしろ放火などせずにそのまま逃げ続けたほうが好都合だったことは間違いがない。信じられないことかもしれないが、ジョーは自らの犯罪を露見させるために、ジョアナの家に火を放ったのだ<sup>30</sup>。火事を見にやってきた人たちは、ジョアナの安否ぐらいは気遣うことだろう。彼女がその場にいっしょにいないとなれば、当然、家の中を捜索する人も出てくる。そして、家の二階で探していたものを発見する。ジョアナは殺されており、しかも、

「かみそり」によって首を深々と切られ、首の皮一枚のところ、頭部と胸部はつながっている有り様である。この無残な状況を見た目撃者はみな、犯行は黒人によってなされたことを知るだろう。ジョアナから奪った「銃」ではなく、自分で用意した「かみそり」をジョーが使ったのは、このように、犯行を企てた人物の人種を暗示するためなのである。この時代、黒人が好んで使う武器は、高価な「銃」ではなく、もっと手に入りやすい「かみそり」であり、人種にまつわるディスコースにどっぷりと浸かっていたジョーは、当然、「かみそり＝黒人の武器」という公式を知っていて、わざとこれを利用しているのだ<sup>32</sup>。

そして、「私刑されるべき黒人として、共同体の注目的になる」という自己処罰的欲動をジョーが持っていた、と結論づけることの最大のメリットは、『八月の光』における最大の謎を解決できる点にあるのだ。最大の謎とは、「なぜジョーは遠くの都市へと逃げずに隣の田舎町でぐずぐずしていたのか」「法廷へと護送中に一旦は逃げるも、なぜ Gail Hightower の家に行き、そこで抵抗することなく Percy Grimm に殺されてしまうのか」という、「逃亡できるのに、そうしないジョー」の問題である<sup>33</sup>。あの気楽な判断を下すステーブズでさえ、この問題に対しては態度を保留している。しかし、「私刑されるべき黒人として、共同体の注目的になる」という自己処罰的欲動を人生の目標に設定してしまうと、当然、その共同体から逃げ出すことは不可能になる。もし、いずれかの機会に、ジョーが完全に Jefferson から逃げ出してしまうと、結局、ジョーは Jefferson において「見えない存在」に逆戻りしてしまう。このように、ジョーが Jefferson から完全に逃げてしまったとすると、この場合のジョーの物語は、『アンクル・トムの小屋』の George Harris とその妻 Eliza のように、passing の物語になってしまうであろう。passing をする「白い黒人」は、アンクル・トムのような「白人に媚びる」黒人ではないが、さりとして、リンチやガスのような「白人女性をレイプしようとする最も危険な」黒人ほどに反抗的な身振りをしているのでもない、ちょうど両者のグレー・ゾーンに位置すると考えられるが、ジョーは明らかに passing を狙ってはいないので、ここではこの問題にこれ以上コミットするつもりはない。要するに、ジョーが「なりたい自分」になるためには、Jefferson を離れることは許されないのだ。しかし、唯一の「居場所」であるそこでは、ジョーは命を狙われる存在であり、最後には、「消し去るべき危険な」黒人種の代表として、「殺害」「去勢」されてしまうのである。比喩的に言うならば、ジョーは、哀れな黒人たち全員の身代わりとして、「十字架」にかけられるのである。ただし、忘れてはいけないのは、ジョーは、徹底して「アンチ・キリスト」であったのだから、この場合の「十字架」も「黒い十字架」だということだ。自らがこの「十字架」を背負っていたことを本能的に感じ取っていたのだろう、ジョーは、ジョアナとの関係が続いている最中に、「何か不吉なことが起ころうとしている。俺はここを出ていかなければならない。」と思いつつも、Jefferson にとどまり続けるのである。

しかし、なぜ、この「黒い十字架」がハイタワーの「家」に立てられることになった

のか、という疑問に対して、納得のいく答えを提示することはできない。様々な解答を案出してみたが、その中で一番よさそうなものをここに書いておきたい。アメリカにおいて、「黒人」の問題を考えると、「黒人にとっての故郷 (home) は、どこにあるのか」という問題が絶えずついてまわる。一つの解答は、Harriet Beecher Stoweのように、ジョージ一家をアフリカに追いやってしまうやり方である。黒人は、アフリカにルーツがあるのだから、アフリカが彼らにとっての「家」なのである、というロジックである。たしかに、Alex Haleyの *Roots* (1976)の主人公 Kunta Kinteのように、アフリカから奴隷として連れてこられた黒人に対しては、何の問題もないこのロジックも、ジョージたちのようなアメリカ生まれの黒人に対しても、留保なく適用できるかということ、はなはだ疑わしい。クンタの子孫である Haley が、Gambia 取材旅行で違和感を持ったように、アメリカ生まれの黒人である彼にとって、ホームはアフリカではなくアメリカなのだ<sup>34</sup>。『八月の光』に話を戻すと、ジョーはアメリカ生まれの黒人であり、その意味では、ジョーのホームはアメリカにあるはずなのだが、この時代のアメリカ南部では、先述したようなアパルトヘイトの時代であり、黒人は人間としての権利を制限されており、人間としては扱ってもらえなかった。そこはとて「ホーム」と呼べるような代物ではなかったのである。この文脈で印象的なのは、マッキーチャンが孤児院からジョーを自分の家に連れ帰る場面である。

“Home,” he said. The child said nothing. The man looked down at him. The man was bundled too against the cold, squat, big, shapeless, somehow rocklike, indomitable, not so much ungentle as ruthless. “I said, there is your home.” Still the child didn’t answer. He had never seen a home, so there was nothing for him to say about it. (505)

「あれがお前の家だ」と呼びかけるマッキーチャンに対して、ジョーはそれが自分の「家」だとは知覚できない。もちろん、文字どおりには、物心ついてから孤児院以外の世界を見たことがないジョーにとって、「家」は知覚できる対象ではない。しかし、同時に、これまで見てきたように、マッキーチャンの家は、ジョーの「家」ではない。ジョーは「根無し草」であるがゆえに、自分の「家」を恋い焦がれる欲望をどこかに宿していると思われるが、それがために、最後の瞬間、ハイタワーの「家」に飛び込んだのだろう。そして、ある意味で、ハイタワーはジョーの「父親」でもある。ジョーの生まれ変わりと思しき、Lena Groveの子供を最初に取り上げたのは、他ならぬハイタワーであった<sup>35</sup>。この「家」において、ジョーが最期を迎えるというささやかな幸福は、彼への Faulkner の「はなむけ」であったのかもしれない<sup>36</sup>。

### III: What Is History? What Is Literature? (Conclusion)

この論考では、ジョー・クリスマスという不可解な存在をなるたけ生けどりにせんと  
の思いから、2つの racial discourse を持ち出し、「南部人ならば、見ただけで黒人を  
それと分かる」という言説によってレッテルを貼られるジョー、「白人女性をレイプし  
た最も危険な黒人」という言説を逆手に取ってアメリカ黒人特有の invisibility を克服  
しようとしたジョー、を見てきた。これら2つのジョーは、根底において複雑に絡まり  
あい、決してここでやってみせたほど完全に分離できるわけではないが、それでも、前  
半の試みはジョーを歴史的に定義するそれ、後半のそれは彼を文学的に定義するそれ、  
と言い換えることはできるだろう。

ここで予想される反論としては、「歴史」一般に言及するには、あまりにも扱っ  
ているテキストの数が少ない、ということである。しかし、ある命題に関して、いかに  
その妥当性を保証する無数の具体例を挙げたところで、数の多さがそれを一般公式に昇  
格させるわけではなく、「具体」と「一般」の間には、常に跳躍不可能な隔たりが存在  
することは自明の理である。(ここで、この「実存の跳躍」を否定するのは、あまりに  
も不毛な実証主義的態度である。) したがって、この論考で使用したテキストは、以下  
に述べる基準によって選定した。まず、メインのテキストは Faulkner の『八月の光』  
であり、これは、「偉大な個人には、彼・彼女の生きた時代のあり方が、より顕著に反  
映されているはずだ」という Stephen Greenblatt の信念を私自身も共有するからであ  
る<sup>37</sup>。そして、Faulkner を読む際の補助線として活用したのが、1930年前後の racial  
discourse を扱ったもののなかで、最も人口に膾炙したテキストである。ベスト・セラ  
ーにも、同時代人の心の琴線に触れる何か本質的なものが備わっているはず、と考えた  
からである。ここで扱った、『ショー・ボート』は出版後すぐに複数回ミュージカル・  
映画化され好評を博したテキストであり、『アラバマ物語』もベスト・セラーかつ映画  
化もされている。

ここに至って、さらにやっかいな問題が生じてくる。『八月の光』のような「純文学」  
と『ショー・ボート』『アラバマ物語』のような「大衆文学」を並列させることは、前  
者の価値を貶めることになりはしないか、という懸念である。「純文学」「大衆文学」の  
差異の消失は、ポストモダンにおいて、現在進行的に起こっている事象であり、本論考  
のように、「ある時代のディスコース」を論じるときには必ず生じてくる事態である。  
しかし、この論考では、「純文学」「大衆文学」の差異も意識したつもりである。「純文  
学」という領域において、Faulkner は、Ferber や Lee あるいは Stowe といった作家  
よりも優れている。それが証拠に、Faulkner は「人種問題」を途中で投げ出したりそ  
れに安易な解答を与えたりすることなく、最も複雑な事態に持ち込むことを厭わない  
「勇敢さ」を持っていたのである<sup>38</sup>。

ところで、「純文学」「大衆文学」の差異が溶解する事態は、「文学」「歴史」の差異が  
溶解する事態と地続きである。その1つの試みが、ベトナム反戦デモ行進を「文学」

「歴史」両方の視座から語ってみせた、Norman Mailerの *Armies of the Night* (1968) である。そして、このようなポストモダンのやり方 (fashion) とは異なりはするが、Faulknerもまた「文学」「歴史」の差異に頭を悩ませていたにちがいない。『八月の光』においては現状分析にとどまっているが、「白人 (ハイタワー) の家に同居する黒人 (ジョー)」という問題の歴史的起源を求めて、Faulknerは新たな大作 *Absalom, Absalom!* (『アブサロム』、1936年) に取り組み始めるのである<sup>39</sup>。

### Notes

作品名とその登場人物に限り、初出は英語表記、以降は日本語表記とした。それ以外の人名、地名に関しては、基本的に英語表記とした。

<sup>1</sup> 例えば、最新のFaulkner概説書にも“Joe’s indeterminate racial status”という記述が存在する (Matthews 169)。

<sup>2</sup> 「ジョーの人種的アイデンティティーを決定するのは不可能である」という主張を支えているのは、このようなポストモダンの「主体への懐疑」からくるものではなくて、むしろFaulkner自身の“[Joe Christmas] didn’t know what he was, and so he was nothing”という発言によるところが大きいのかもしれない (Gwynn 72)。作家自身の発言を軽んじることは慎まなければならないが、それでも、この発言は『八月の光』執筆から四半世紀以上も経ったあとでなされたのだから、その正確性に疑問を呈してみることも必要なのではないか。

<sup>3</sup> Hugh Ruppersburgは、『八月の光』の語りを分析して、語り手を“*As an organizer, interpreter, moralist, observer, and storyteller, the narrator is the most important structural element in Light in August*”と定義しているが、私の試みは、「語り手」を「語りの構造」ととどまらず、「内容」的にも最も重要なファクターだと考えるものである、と言えるかもしれない (32)。

<sup>4</sup> 逆の言い方をすれば、ジョーと並んで『八月の光』の二大主人公ともいうべきリーナについては、この論考では扱わない。さしあたってのところ、リーナはDon Quixoteのような喜劇的人物だと定義するだけにとどめたい (Wadlington 136)。もちろん、リーナにはこのようなレッテルではすまないほどの (特に「ジェンダー」の文脈において) 深みがあり、Deborah Clarkeの批評はリーナのそうした側面を扱ったものなかで最良の批評である。しかし、そのClarkeにしても、表面的には“the pastoral comedy of Byron and Lena”と形容せざるを得ないのである (95)。

<sup>5</sup> Hannah Arendtは、異人種間結婚を禁止する法律を“the most outrageous law of Southern states”と非難している (496)。ただし、南部の人種問題に対する彼女の立場は、Faulknerと同じく、中道、あるいはやや保守的である：“It has been said, I think again by Mr. Faulkner, that enforced integration is no better than enforced segregation, and this is perfectly true” (496)。人種問題に対するFaulknerの立場は、対外的には、それを厳しく非難する姿勢をとったが、国内的には、中道・穏健派のそれであったため、そのような煮え切らない立場こそが差別を温存してきたのであると、人権運動家からは「保守派」のレッテルを貼られることとなった (Polsgrove 95-98)。



<sup>6</sup> Eric Sundquist は、著書 *Faulkner: The House Divided* で、*Plessy v. Ferguson* (1896) から *Brown v. Board of Education* (1954) に至る、ジム・クロウ法時代の南部の精神状況を考察している。彼のターゲットは、「黒人男性は白人女性と寝たがっている」という幻想・ヒステリーを生み出す、白人種至上主義の「言説」を明らかにすることだが、そうするために、Mark Twain, Thomas Dixon, Thomas Nelson Page, Richard Wright といった「文学」テクストに焦点を当てている。

<sup>7</sup> アングロ・サクソン系の白人とスペイン系の白人では、異人種混交に対する感覚が異なる。アングロ・サクソン系が厳格に異人種混交を禁じたのに対し、植民地経営に乗り出す以前からアラブ系との混血が進んでいたスペイン系は、異人種混交にやや寛容な姿勢を見せた。したがって、新大陸のアングロ・サクソン社会（アメリカ）では「非白人」とされた「混血（*mestizo* は白人とインディアンの混血、*mulato* は白人と黒人の混血）」も、スペイン系社会（メキシコ）では「白人」に分類された：“A drop of black blood made you black in Anglo-Saxon society, while in the Portuguese and Spanish world, *mestizos* and *mulatos*, no matter how dark, were invariably regarded as part of white society, although admittedly second-class member” (Gonzalez 20)。

<sup>8</sup> Philip Weinstein は、ジョーが孤児院の栄養士に「ちびでニガーの悪党」と罵られる場面を持ち出して、ジョーがいかにして黒人になるのかを説明しようとする。もちろん、この場面でジョーは黒人になっている、という Weinstein の結論には私も賛成だが、そのプロセスにおいて、「(イデオロギーの) 呼びかけ (とそれへの応答) が人を主体にする」という Louis Althusser の概念を適用しようとするのには賛成できない：“Identity is reflexive in just this way—responsive, reciprocal, a negotiation with societal interpellations—and Joe Christmas becomes (it takes all of *Light in August* to tell this story) a ‘little nigger bastard’” (170)。Althusser 理論において、「呼びかけ」は「応答」に先立つが、このエピソードにおいては、「僕はここにいるよ」というジョーの「応答」的文句は、「ちびでニガーの悪党」という栄養士の「呼びかけ」的文句に先立っていることを Weinstein は見落としている。それ以上に、人種の文脈では、「呼びかけ」だけが一方的に存在し、「呼びかけ」「応答」という双方向的なコミュニケーションの形態になっていないことに注意しておく必要がある。(実際に、ジョーがこの「呼びかけ」に対して「応答」した形跡は見当たらない。)

<sup>9</sup> 「白人」、特に「労働者階級の白人」、の「白さ」を定義づける試みにおいて、David Roediger は Michaels と同じ趣旨の発言をしている：“Race is thus both unreal and a seeming reality” (6)。また、ヨーロッパのユダヤ人差別を参照しながら、アメリカの人種問題を論じていることに違和感を持つ向きもあろうが、1948年の *Perez v. Sharp* (カリフォルニア州で、*Loving v. Virginia* に先立って、異人種間結婚を禁じる法律を違憲とした裁判) でも、判事の一人が報告しているが、異人種間結婚を禁じる当局の人種差別のロジックは、Adolf Hitler が *Mein Kampf* (1925-26) で示しているそれと全く同じだと原告は指摘している。

<sup>10</sup> ここで保安官が用いている funny という語の含みには注意が必要だと思われる。このあと、ハイタワーと言葉のやりとりをする食料品店の店主も、「あいつには funny なところがあった」と口にするが、この場合の funny は unnatural の意味である (626-27)。『ショー・ポート』においても、「Lemoyne を離れさえすれば、ジュリーはすぐに元気になるだろう」というステイブに対して、船長 Andy の妻 Parthy は “That’s a funny thing” と二度繰り返す (139)。

1927年のミュージカル・バージョンにおいては、この下りが書き換えられており、さらに劇的なものになっている (Williams 160)。ただし、これの台本はすでに失われているので、これに最も忠実であった1936年の映画版を利用すると、黒人流行歌“Can't Help Lovin' Dat Man of Mine”をジュリーが歌っているのを耳にした黒人料理番 Queenie は、“[It] sounds funny for Miss Julie to know it”と言う。これに対し、人種的アイデンティティーがばれやしないかと、ジュリーはうろたえる。ただし、funnyは人種的アイデンティティーを問題にする文脈でのみ使われたわけではなく、Faulknerの他の例を挙げると、『サンクチュアリ』において、売春宿のおかみ Miss Reba は、性的不能のギャング Popeye を「あいつにはどこか funny なところがあると思っていた」とけなしているが、この場合の funny には queer という響きがある (356)。さらに、Riché Richardson は、Spike Lee の映画 *Crooklyn* (1994) において、北部 (都会) の黒人 Troy が南部 (田舎) の「他者性」、地理的アイデンティティーの差異、を暗に示すために funny という語を使っていることを指摘している (193)。

<sup>11</sup> 「ポストモダンの理論的蓋然性」という文言は、Steven Knapp と Michaels の小論文 “Against Theory” をある程度意識したものである：“By ‘theory’ we mean a special project in literary criticism: the attempt to govern interpretations of *particular* texts by appealing to an account of interpretation in *general*” (723 emphasis added)。繰り返しになるが、「ジョーの人種は決定不可能である」というディコンストラクション的結論は間違いないが、それでも「理論的には」という留保を伴う。要するに、ポストモダンの「理論」によって武装した現代知識人に限っては、「ジョーの人種は決定不可能である」という結論を下すことは正しい、という意味であり、これを1930年代のアメリカ南部人一般の「現実」認識にまで拡大適用しようとするときには、それは誤りである。ジョーの人種的アイデンティティー決定のプロセスを「構築主義」的だと解釈している批評の代表例として Thadious Davis の *Faulkner's “Negro”* を挙げることができる。：“In revealing Joe's history and destiny, Faulkner presents ‘Negro’ [. . .] as a social construct” (130)。『八月の光』をその前の傑作 *The Sound and the Fury* (『響きと怒り』、1929年) を切り分けて定義づける際に、「家族」から「個人」へと焦点がずらされている、と指摘する Davis の分析は鋭いが、そこには、南部という「田舎」の土着性が根こぎにされている難点がある (129)。要するに、Davis が「個人」を論じる際に、そこで想定されている「個人」は、ポストモダンの・都会的な「個人」なのだ。また、James Snead は、語り手 (Jefferson の住民) が人種決定のプロセスにおいて「構築主義」的なもの (arbitrary codes of dominance) を「本質主義」的なもの (“fact”) にすりかえていることに気づいているが、このプロセスを misrecognition と断じることで、彼自身がポストモダンの「理論」を暗黙の前提にして、語り手に「超越的な視点」から分析を加えるのみで事足りるとする誤謬をおかしている：“Society here turns arbitrary codes of dominance into ‘fact.’ To make matters worse, the reader helps accomplish the entire process” (85 emphasis added)。しかし、「歴史化」する視点を欠いているものの、Snead の論は close reading のお手本のような説得力に溢れるものであり、彼と私の見解の差異は、ポストモダンの「理論」(に不可避免的に付属する「盲点 (blindness)») に対して懐疑的な neopragmatism の立場をとるかとならないかだけのように思われるほどである。さらに、この文脈で興味深い分析に Gena McKinley の “*Light in August: A Novel of Passing?*” がある：“[. . .] Faulkner has taken to its extreme the idea of race as a social construct” (151)。この指摘は、ジョーのふるまいを、白人として passing してしまう自分自身への「怒り」の観

点から説明し、ジョーをあくまで黒人であると捉えようとする全体の論旨とは矛盾している。確かに、「passingする黒人」はカラー・ラインの恣意性を暴き、「人種とは構築主義的である」ことを証明する事例であるが、McKinleyの結論は「ジョーの物語はpassingのそれではない」だからだ。これらの研究者たちとは反対に、『八月の光』における人種的アイデンティティーのあり方が本質主義的であることを見抜いているのはKevin Raileyである。

Joe Christmas wonders whether he is “black” or “white” as if those terms have definite referents in material reality, that is, in biology. His question only exists because he has already accepted the terms of a strict ideology of race as they have been established by the majority white population of Yoknapatawpha County (and Mississippi). Critics have claimed that *Light in August* investigates this very social structuring. I disagree. (97)

マルクス主義的な分析をするRaileyの強調点は「人種」「ジェンダー」ではなく「階級」であるが、テキストを歴史化した上で精読していく彼の論はFaulkner批評の最良の一つである。(もちろん、Raileyは「階級」重視のマルクス主義者であるがゆえに、「人種」「ジェンダー」を本質主義として定義するのではあるが。)

<sup>12</sup> Sundquistは、『八月の光』とTwainの*Pudd'nhead Wilson* (1894)の共通点として、ステーブズとDavid Wilsonがともに弁護士であり、「血」の人種理論を信じていることを挙げている(69)。また、Susan Donaldsonは、ステーブズがこの「人種理論」によって白人男性によるofficial historyを体現していることを見抜いている(118)。

<sup>13</sup> 他にも、ジョーがMax Confreyとその連れの男に殴られる場面で、「黒人の血」が登場する。彼らは、ジョーが黒人であるかどうか確かめるために、殴ってもっと血を出させる必要があると主張する(第9章)。

<sup>14</sup> 結局、incest(人類普遍のタブー)とmiscegenation(アメリカ南部におけるタブー)の対立に帰着するわけだが、Faulknerの読者ならだれでも、前者よりも後者のほうが許されざるタブーであることを知っている。

<sup>15</sup> この意味において、ジョーの物語は一見それと無関係に見えるハインズ、ハイタワー、グリムの物語と切り離しえない、とするSundquistの分析は秀逸である：“[...] it is only those diversions from a single line of action—into the extended recapitulative histories of Hines, Hightower, and Grimm—that can make visible the complete alienation of Christmas in formal terms” (77)。要するに、比喩的な言い方になるが、ジョーをvisibleなものにする物語は、彼をinvisibleなままにとどめおこうとする物語と分離不可能だ、ということである。また、ジョーは(彼自身を定義づける)カルヴィニズムのナラティブをなぞる部分とそれから逃れようと(自分自身で新たに意味を生み出そうと)する部分を併せ持っている、というWarwick Wadlingtonの指摘も注目に値する(134)。

<sup>16</sup> 北部では、黒人人口の絶対数が少ないこともあって、黒人のステレオタイプの形成に、南部とは「時間差」があった。例えば、「白人女性と寝ようとする黒人男性」というイメージは、南部では奴隷解放・南北戦争終戦直後からあったのに対して、北部では、『国民の創生』が公開されてようやく、南部の白人に対する共感が生まれてきたのである。(その意味で、この映画は「白人帝国の創生」にまさに成功した、といってよいであろう。)

<sup>17</sup> Peter Lurieは、『八月の光』を読み解く際の補助線として『国民の創生』を用いているが、この映画と同じように「黒人＝野獣」という表象をしている映画として*West of Zanzibar*

(1928), *Diamond Handcuffs* (1928)などを挙げている (73)。このようなステレオタイプがあると、白人の黒人に対する暴力が正当化できる利点があるのである。

<sup>18</sup> Wrightの *Native Son* (1940)で、Mississippi生まれChicago, Illinois育ちの黒人Bigger Thomasは弁護士Boris Maxに対して、「黒人がキリスト教を信じれば信じるほど、白人は黒人を支配しやすくなる“The white folks like for us to be religious, then they can do what they want to with us”」という趣旨の発言をする (778)。

<sup>19</sup> アンクル・トムのような「白人に従順な黒人」を否定することで評価されたRalph Ellisonの *Invisible Man* (1953)も、1960年代になると、むしろ「消極的な(白人への)反抗」にすぎないと非難の対象になった (Richardson 156)。

<sup>20</sup> Erskine Caldwellの *Tobacco Road* (1932)は、Georgiaの貧乏白人の生態を描いた作品だが、Pearl Lesterは12才で結婚をしている。また、1936年にAlabamaの「貧乏白人」を住み込みで取材したJames Ageeのノン・フィクション *Let Us Now Praise Famous Men* (1941)には、以下のような記述がある。

Many girls marry at sixteen, not a few at fifteen or even fourteen; nearly all are married by seventeen; by the time they are eighteen, if they are unmarried, they are drifted towards the spinster class, a trouble to their parents, an embarrassment to court and be seen with, a dry agony to themselves [. . .].  
(247)

<sup>21</sup> 『アラバマ物語』は、「黒人男性は白人女性をレイプしようとする野獣である」というヒステリーを批判するテキストであるのだが、ロビンソンが有罪宣告を受け射殺されるために、このヒステリーがあたかも真実であるかのように受けとめられる可能性がある、とSusan Courtneyは指摘する (11-12)。北部に住むある白人女性は、(白人女性をレイプしようとするので)黒人少年が怖くて仕方がない、と言うのだが、彼女がこのような考えるようになったのは、『アラバマ物語』を学校で読まれたためであり、レイプ事件のある南部は怖いところだとも考えている。

<sup>22</sup> ミス・ミニーは映画館通いをしているが、おそらくそこで彼女が見ているのは『国民の創生』だろう、というDiane Robertsの指摘は興味深い (171)。

<sup>23</sup> ジョーの人種的アイデンティティを論じる際に、ほとんど全ての批評家が、「白人」「黒人」という対立項しか設定していないだけに、ジョーはアンクル・トムのような“the Black Christ figure”ではないのだ、と論じているMyra Jehlenの慧眼には驚かされる (80)。

<sup>24</sup> ジョーとほぼ同じ罪で告発されるピッガーも、この罪を(やりたくても怖くてなかなか実行できない)「黒人が白人になしうる最良のこと」と考えることもある。

[. . .] Bigger felt a wild and outlandish conviction surge in him: *They [Bigger's family and friends] ought to be glad!* It was a strange but strong feeling, springing from the very depths of his life. Had he not taken fully upon himself the crime of being black? Had he not done the thing which they dreaded above all others? Then they ought not stand here and pity him, cry over him; but look at him and go home, contented, feeling that their shame was washed away. (Wright 721)

また、Donaldsonは、ジョーの物語を「もう一つの歴史」「歴史の裏側」と定義し、ジョーのふるまいと、当時南部で私刑により殺害された黒人を収めた写真が発するメッセージを重ね合

わせている。そうした死体は、それを見るものに、死体を生み出した white supremacy の十全性ではなく、それがいかにもろいものであるかを印象付ける「反抗的な」視線を持っているのである (120-22)。

<sup>25</sup> アンクル・トムのような差別を耐え忍ぶ黒人にとっては、「アガペー」という形をとるキリスト教も、白人男性という支配者に利用されると全く別の様相を呈してくる。その最も極端な例をハインズに見ることができるだろう。もちろん、白人にとってキリスト教は人種差別を正当化する道具であるのだが、ハインズは神の教えを忠実に実行する「しもべ」であろうとしながら、最終的には「自分の判断こそ神の意志に他ならない」と考える「悪魔」になってしまう。「自分の判断こそ神の意志に他ならない」というハインズの思考は、むしろ、人間である自らを「主人」の座に、神を「しもべ」の座に据えるものであるからだ (Robinson 172)。(神とは、その意図が人間にとって不可知であるから神なのであって、人間の善悪判断がそのまま神のそれと一致すると考えてしまえば、神は神であることをやめ、人間の手先になりさがってしまう。) Robinson の論は、Mikhail Bakhtin を援用して Faulkner のナラティブを分析している Judith Lockyer の論をさらに一歩先に推し進めたものであるが、Lockyer は「ジョーはハインズにとって抽象概念でしかない“Joe is for him nothing but an idea”」と指摘している (89)。ハインズのレベルまでにキリスト教を突き詰めると、人間も人間でなくなり「もの」と化してしまう。まさにこれが、黒人の「見えない人間」化である。Faulkner もこのことに気づいていたので、ハインズと同じような狂信者マッキーチャンが初めてジョーに会ったとき、「馬」や「中古の鋤」を検分するような目つきで彼を見た、と記述しているのである (503-04)。ちなみに、「アフリカ系アメリカ人」による第二番目の小説とされる *The Garies and Their Friends* (1857) には、オークションでの黒人奴隷の扱いが「馬」や「牛」に対するそれ以下であった、という記述がある。

Mr. Winston had been a slave. Yes! that fine-looking gentleman seated near Mr. Garie and losing nothing by the comparison that their proximity would suggest, had been fifteen years before sold on the auction-block in the neighbouring town of Savannah—had been made to jump, show his teeth, shout to test his lungs, and had been handled and examined by professed negro traders and amateur buyers, with less gentleness and commiseration than every humane man would feel for a horse or an ox. (Webb 8)

<sup>26</sup> John Duvall は、ジョーとジョアナの決別を、ジョーが Ralph Waldo Emerson 流の self-reliance を信じていたためにジョアナによるカテゴライズを嫌った、という観点から説明しているが、もし本当にジョーが self-reliant な人物だったのならば、なぜこれほどまでに自分の人種的アイデンティティーにこだわるのかという疑問に答えることはできないだろう (31-33)。また、たとえそうであったとしても、ジョーの悲壮感とは、Emerson の楽観主義とは遠く似つかない。ほとんどの批評家がジョーを「運命」に囚われた人物であると見ているが、「運命」とは Emerson の哲学と完全に矛盾するものである。

<sup>27</sup> ジョーが嫌悪する Freedman Town にアンクル・トム流の「古き良きプランテーション」の含みがあることを嗅ぎつける Davis の嗅覚は見事である (140)。

<sup>28</sup> おそらく、この場面を扱った批評で最も有名なものが Doreen Fowler の“Joe Christmas and ‘Womenshenegro’”だと思われるが、この論文はあまりにも性急に「精神分析理論」の scheme を適用しすぎているらしいがある。南部では、白人男性に権力があり、女性・黒人・

子供には権力がなく、なかでもこの黒人女性は究極の弱者だという分析は正しいが、このあと、「父＝白人男性＝強者、母＝女性・黒人＝弱者、子＝ジョー」という精神分析の家族関係の図式を持ち出し、ジョーは、「母＝女性・黒人」のような弱者ではなく、「父＝白人男性」のような強者になろうとする欲望を持っていると断じることで、完全に論理的な一貫性を失っている。要するに、この図式ではジョアナ殺害後のジョーのふるまいが全く説明できず、そのことを悟ってか、Fowlerの言葉にもとまどいが見受けられる：“In the end, Joe appears to surrender and to accept as inevitable the immolation of self which he has resisted for longer than knowing remembers, for as long as memory believes” (157 emphasis added)。そもそも、ジョーは「俺が白い黒人 (part nigger) でなかったなら、人生を無駄にしたことになる」と言っていることからして、Fowlerの「白人になろうとするジョー」という指摘は間違っている (586)。

<sup>29</sup> その意味で、ジョーとジョアナの性的関係、黒人男性 (元奴隷) と白人女性 (元主人) の異人種混交、を小説のクライマックスだとする Sundquist の指摘は正しい (81)。このクライマックスの伏線と考えられるものを物語への登場順に挙げておくと、まずは、ジョアナ殺害の前夜、なかなか寝つけないジョーは、庭に真っ裸で立つ。そこに、白人女性が運転する自動車が通りかかり、ジョーの姿を見た彼女は叫びをあげる (第5章)。もちろん、彼女はジョーが黒人であることは知らないが、読者にはすでにそのことは知らされているのである。次にくるのが、金がないのに白人売春婦を買って、精算時に「おれは黒人だ」といってその場をやりすごしていた、放浪時代のエピソードである (第10章)。この作戦は、異人種混交が最大のタブーである南部ではうまくいくのだが、北部ではうまくいかず、そのことを知ったジョーは、ショックのあまり売春婦を半殺しの目にあわせる。(もちろん、南部でのような反応を引き起こせないとすると、ジョーの人生の目標は達成できない。) 最後に、ジョアナ殺害後、白人カップルを乗せた自動車にヒッチハイクするエピソードが挙げられる (第12章)。ジョーは屋敷の前で車を止めるのだが、彼の右手には銃が握り締められ、その右手を突き出していたのだ。ここは最初のエピソードの反復になっており、この場合にはジョーは服を着ているのだが、象徴的に言えば、右手に高く掲げられた銃は「勃起したペニス」である。また、「invisibleなものが visibleなものになる」という文脈では、幼いジョーが歯磨き粉を吐き出すことでカーテンの裏に隠れて「栄養士」の逢引きの場に居合わせてしまった「原体験」はもちろんのこと、ジョーがタブーを犯し Mottstown で捕まることで、「ジョーは死んだ」と夫に聞かされていた Mrs. Hines が再びジョーの存在を認識できるようになることも注目に値する。こうしたジョーの対極にある黒人、すなわちアンクル・トムの黒人、を Faulkner の作品中から探してみると、『響きと怒り』の Dilsey がそれにあたるだろう。先の3つのパートでは主人公の白人男性が1人称で語るのに対し、彼女が主人公を務める第4部は3人称で語られる。アンクル・トムの黒人は「自己」を語りうる「声 (voice)」を持たないがゆえに、ディルシーの物語は1人称では語り得ない、と Faulkner は悟っていたのであろう。のちに出された Appendix, Compson: 1699-1945 のディルシーの項には、“They endured”とだけ記されているが、ここで使われている代名詞が単数の she ではなく複数の they であるところにも同じような意図があったのかもしれない (1141)。

<sup>30</sup> ジョーの他に、ブラウンが放火した可能性もあるが、その場合のブラウンの動機を私は思いつかない。

<sup>31</sup> ほぼ同じロジックを活用した人物が、“Barn Burning” (1939) の Abner Snopes である。

この短編では、「人種」よりも「階級」の意味合いが強いが、彼のような「貧乏白人」にとって、納屋に火をつける行為は、その所有者で雇用主の「上流階級」に「存在感」を見せつける唯一の手段であるのだ。「人種」の文脈では、「火」はKKK団の「燃えさかる十字架」を連想させ、James Weldon Johnsonの*The Autography of an Ex-Colored Man* (1912) (この作品は1927年に再版されて注目を受ける) では、黒人が火あぶりにされるのを目撃した主人公は、黒人として生きることをあきらめ、北部で白人として生きる。私刑での「火あぶり」を最も雄弁に記述している文学作品の1つに、Jean Toomerの*Cane* (1923)の中に収められた詩“Portrait in Georgia”があり、そこでは当時の南部における黒人の状況が以下のように述べられる。

Hair—braided chestnut,  
 coiled like a lyncher's rope,  
 Eyes—fagots,  
 Lips—old scars, or the first red blisters,  
 Breath—the last sweet scent of cane,  
 And her slim body, *white as the ash*  
*of black flesh after flame.* (27 emphasis added)

<sup>32</sup> この時代には、使用する「武器」とその使用者の「人種」の相関性が信じられていた。Martha Bantaは、彼女の生まれ故郷、1930年ごろのIndianaでは、「銃」を使うのが「白人」、「ナイフ」を使うのが「(南部からやってきた) 貧乏白人」、「かみそり」を使うのが「黒人」、というステレオタイプがまかり通っていた、と報告し、ジョーは黒人としての自己認識から「かみそり」を武器に選んだ、と論じる(205)。これは北部(Indiana)でのステレオタイプにすぎない(それでも全国的に通用したステレオタイプだと思うが)ので、もう1つ興味深い分析を挙げておく。奴隷解放の必然的産物として、黒人男性と白人女性の異人種間結婚を危惧したThomas Jeffersonは、「黒人＝オランウータン」というアナロジーを思いつく。「黒人男性が、同種の女性よりも審美的に優れている白人女性を好むように、オランウータンのオスも、同種のメスよりも審美的に優れている黒人女性を好む」というものであり、このアナロジーは一般に浸透した。ところで、Faulknerの先駆者のEdgar Allan Poeは“The Murders in the Rue Morgue” (1841)という短編推理小説を書いているが、ここでは、白人女性がオランウータンによって「かみそり」で首をかき切られて殺される。「ジョー＝オランウータン」という等式はどこにもないけれども、この2つの言説を適用すると、白人女性の首をかみそりで切って殺したジョーはオランウータンのような黒人である、ということになる(Sundquist 85-88)。ただし、「黒人男性が、同種の女性よりも審美的に優れている白人女性を好む」という元大統領の主張は、あながちフィクションではない。ある日、白人看守に独房に白人女性のピンナップを貼ることを禁じられたCleverは、黒人である自分が同種の女性よりも白人女性を好んでいる事実には愕然とする。そして、次のような疑問を黒人の囚人たちにおつける。

One afternoon, when a large group of Negroes was on the prison yard shooting the breeze, I grabbed the floor and posed the question: which did they prefer, white women or black? Some said Japanese women were their favorite, others said Chinese, some said European women, others said Mexican women—they all stated a preference, and they generally freely admitted their dislike for black women.

"I don't want nothing black but a Cadillac," said one.

"If money was black I wouldn't want none of it," put in another. (8-9)

もちろん、Cleaverたちが黒人女性よりも白人女性を好むのは、white supremacyというイデオロギーを知らず知らずのうちに身につけているためであるが、この発言は、Kenneth Clark, Mamie Clarkが行ったracial preferenceをめぐる心理学テスト (*Brown v. Board of Education*の判決に影響を与えた実験) といったものよりもはるかに雄弁にこの事実を伝えている。また、「銃」が高価であったことは、*The Mansion* (1959)のMink Snopesの事例に詳しく書かれている (この事例はジョーの死より数十年後のことである)。ミンクはいとこのFlem Snopesに復讐を企てるのだが、出所直後の彼にはほとんど金がなく、銃と銃弾を調達するのに苦勞する。

<sup>33</sup> また、裁判の直前に逃げることは、黒人によるこの種の犯罪に対する、最も南部的な解決を可能にする。その解決策とは「私刑」であり、「幸運」なことに、Jeffersonには、『アラバマ物語』のアティカス、Native Sonのボリスのような正義派の弁護士はいない。この町の最大の良心はハイタワー (ただし彼は弁護士ではなく冒瀆的な説教を行った元牧師) だと考えられるが、彼は「世捨て人」であり、アティカス、ボリスのように積極的にジョーを弁護することはない。リーナの出産に立ち会うことで多少その態度を改めて、最後の瞬間にジョーのアリバイをでっちあげる程度である。Ted Atkinsonは、この時代の南部で「私刑」が相次いだことを、「支配者階級の没落」「暴徒による無秩序状態」から説明し、「乾燥の九月」の理容師ホークショーを無力な正義派だと論じている (159-60)。この意味において、ハイタワーとホークショーは全く同類だということができよう。また、強力な正義派を用意してしまえば人種問題が「メロドラマ」になってしまうことをFaulknerは危惧していた、と考えることもできよう。

<sup>34</sup> Paul Gilroyは、Martin Delanyのような汎アフリカ主義者ですら、「ルーツ」であるアフリカと「祖国」であるアメリカへの愛着に引き裂かれていた事例を紹介したあと、このように指摘している：“The ambivalence over exile and homecoming conveyed by these remarks has a history that is probably as long as the presence of African slaves in the west” (24)。ちなみに、Delanyは*Blake or The Huts of America* (1861-62)という小説も書いているが、特にその前半部において、主人公Henry Blakeはアンクル・トムの黒人を生み出すシステムとしてのキリスト教を批判している。

"You must make your religion subserve your interests, as your oppressors do theirs!" advised Henry. "They use the Scriptures to make you submit, by preaching to you the texts of 'obedience to your masters' and 'standing still to see the salvation,' and we must now begin to understand the Bible so as to make it of interest to us." (41)

<sup>35</sup> 外見的に言えば、ジョーよりもむしろブラウンのほうが、黒人の「血」を持つように思われる。ブラウンのほうがもっと浅黒い肌をしており、彼がジョーの人種的アイデンティティーを暴露するのは、自分にそのような嫌疑を向けられるのを防ぐ意味もある、というSneadの指摘は正しい (92-93)。

<sup>36</sup> 最後に、なぜジョーはこのように激烈な人生を生きようと欲したのか、という疑問が残る。安易な答えを出すのは控えたいが、それでもFlannery O'Connorの“A Good Man Is Hard to Find (1953)”に登場するThe Misfitの発言は示唆的である：“You know,” Daddy said,



‘it’s some that can live their whole life out without asking about it and it’s others has to know why it is, and this boy [The Misfit] is one of the latters. He’s going to be into everything!’ (128-29)。要するに、ジョーもザ・ミスフィットも、後者の父親が言うところの「(他の人間が考えずに済ませる) 人生についての疑問をつきつめるタイプ」である、ということだ。

<sup>37</sup> Greenblatt の言葉は以下の通りである。

The problem is not only lack of patience but a sense of hopelessness: after a thousand [stories], there would be another thousand, then another, and it is not at all clear that we would be closer to the understanding we seek. So from the thousands, we seize upon a handful of arresting figures who seem to contain within themselves much of what we need, who both reward intense, individual attention and promise access to larger cultural patterns. (6)

<sup>38</sup> だからといって、私は、「Faulkner は、これほど複雑な事態を認識することのできた知性派の巨人だ」と言いたいわけではない。Mailer のエッセイ “The White Negro” (1957) は「冷戦」時代の精神的荒廃をあまりにも鋭くえぐり出しているが、これを収めた *Advertisements for Myself* (1961) で、Mailer はこのエッセイの執筆をめぐる Faulkner とのやり取りを紹介している。ここで面白いのは、知性において優っているのは Mailer であるが、そのこととよい小説が書けることは別物である、と Mailer が気づいているところである。

*It came down to no more than that I had been dismissed by a novelist who was to me a great writer, and in reflection from the ice of his few lines had been cast the light of how I would properly be seen if I could not flesh the bold loud air of my pronouncements with writing better than I had so far done. Like a latent image in the mirror of my ego was the other character Faulkner must have seen: a noisy pushy middling ape who had been tolerated too long by his literary betters. (280)*

要するに、Faulkner は、神のような知性（いわゆる「理論」）によって小説を書いたのではなく、同時代の「言説」にどっぷりつきながら本能のおもむくままに小説を書いた結果、常人にはたどりつき得ない高峰に至ったのである、と私は言いたいのである。例えば、Calvin Burden の人種理論 “But we done freed them [lowbuilt black folks] now, both black and white alike. They’ll bleach out now. In a hundred years they will be white folks again” も Faulkner オリジナルのものではなく、アメリカ独立の頃からあった「言説」である：“Some theorists even held that skin color was merely a short-term result of exposure to a given environment and that Blacks would literally whiten over time, without mixing of the races. Such extreme environmentalism was common [. . .]” (581, *Wages* 34-35)。

<sup>39</sup> 例えば、『アブサロム』では、『八月の光』と同じく、「異人種混交」をテーマにしながら、後者にはなかったリベンジ・プロットを物語の中心に据えている。リベンジ・プロットとは、奴隷制の時代に、白人主人に自分たちの女性を寝取られた（レイプされた）黒人男性が、今度は仕返しに白人女性と寝てやろうとする物語であり、Thomas Sutpen は、Charles Bon の母に黒人の血が混じっているのを発見すると、彼女と息子を捨て去っており、母は仕返しを誓ってボンをトマス の娘 Judith Sutpen のところにやろうと画策していた。「人種」のリベンジ・

プロットに加えて、「階級」「ジェンダー」などの視点も前景化しているのが『アブサロム』の特徴なのだが、この辺りについては、稿を改めて論じるつもりである。

### Works Cited

- Agee, James. *James Agee*. Ed. Michael Sragow. New York: Lib. of America, 2005. Print.
- Arendt, Hannah. "Reflections on Little Rock." *Interracialism: Black-White Intermarriage in American History, Literature, and Law*. Ed. Werner Sollors. Oxford: Oxford UP, 2000. 492-502. Print.
- Atkinson, Ted. *Faulkner and the Great Depression: Aesthetics, Ideology, and Cultural Politics*. Athens: U of Georgia P, 2006. Print.
- Banta, Martha. "The Razor, the Pistol, and the Ideology of Race Etiquette." *Faulkner and Ideology*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1995. 172-216. Print.
- Clarke, Deborah. *Robbing the Mother: Women in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. Print.
- Cleaver, Eldridge. *Soul on Ice*. New York: Delta, 1968. Print.
- Courtney, Susan. *Hollywood Fantasies of Miscegenation: Spectacular Narratives of Gender and Race, 1903-1967*. Princeton: Princeton UP, 2005. Print.
- Davis, Thadious M. *Faulkner's "Negro": Art and the Southern Context*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983. Print.
- Delany, Martin R. *Blake or The Huts of America*. Boston: Beacon, 1970. Print.
- Donaldson, Susan V. "Light in August, Faulkner's Angel of History, and the Culture of Jim Crow." *Faulkner's Inheritance*. Ed. Joseph R. Urgo and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2007. 101-25. Print.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990. Print.
- Faulkner, William. *Novels 1926-1929*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Lib. of America, 2006. Print.
- . *Novels 1930-1935*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Lib. of America, 1985. Print.
- . *These Thirteen*. New York: Cape, 1931. Print.
- Ferber, Edna. *Show Boat*. New York: Doubleday, 1926. Print.
- Fowler, Doreen. "Joe Christmas and 'Womanshenegro.'" *Faulkner and Women*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1986. 144-61. Print.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 1993. Print.
- Gonzalez, Juan. *Harvest of Empire: A History of Latinos in America*. New York:

- Penguin, 2000. Print.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare*. Chicago: U of Chicago P, 1980. Print.
- Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Charlottesville: UP of Virginia, 1959. Print.
- Jehlen, Myra. *Class and Character in Faulkner's South*. New York: Columbia UP, 1976. Print.
- Knapp, Steven and Walter Benn Michaels. "Against Theory." *Critical Inquiry*. 8.2 (1982): 723-42. JSTOR. Web. 15 Sept. 2009.
- Lee, Harper. *To Kill a Mockingbird*. New York: Harper, 1961. Print.
- Lockyer, Judith. *Ordered by Words: Language and Narration in the Novels of William Faulkner*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1991. Print.
- Lurie, Peter. *Vision's Immanence: Faulkner, Film, and the Popular Imagination*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2004. Print.
- Mailer, Norman. *Advertisements for Myself*. London: Deutsch, 1961. Print.
- Matthews, John T. *William Faulkner: Seeing through the South*. Malden: Blackwell, 2009. Print.
- McKinley, Gena. "Light in August: A Novel of Passing?" *Faulkner in Cultural Context*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1997. 148-65. Print.
- Michaels, Walter Benn. "Autobiography of an Ex-White Man." *Transition*. 73 (1997):122-43. JSTOR. Web. 15 Sept. 2009.
- . *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham: Duke UP, 1995. Print.
- O'Connor, Flannery. *The Complete Stories of Flannery O'Connor*. New York: Farrar, 1971. Print.
- Pascoe, Peggy. *What Comes Naturally: Miscegenation Law and the Making of Race in America*. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.
- Polsgrove, Carol. "William Faulkner: No Friend of *Brown v. Board of Education*." *JBHE*. 32 (2001): 93-99. JSTOR. Web. 15 Sept. 2009.
- Railey, Kevin. *Natural Aristocracy: History, Ideology, and the Production of William Faulkner*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999. Print.
- Richardson, Riché. *Black Masculinity and the U.S. South: From Uncle Tom to Gangsta*. Athens: U of Georgia P, 2007. Print.
- Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: U of Georgia P, 1994. Print.
- Robinson, Owen. *Creating Yoknapatawpha: Readers and Writers in Faulkner's Fiction*. New York: Routledge, 2006. Print.
- Roediger, David R. *Towards the Abolition of Whiteness: Essays on Race, Politics, and Working Class History*. London: Verso, 1994. Print.
- . *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*.

1991. London: Verso, 1999. Print.
- Ruppersburg, Hugh M. *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*. Athens: U of Georgia P, 1983. Print.
- Saks, Eva. "Representing Miscegenation Law." *Raritan*. 8.2 (1988): 39-69. Print.
- Snead, James A. *Figures of Division: William Faulkner's Major Novels*. New York: Methuen, 1986. Print.
- Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983. Print.
- Toomer, Jean. *Cane*. New York: Liveright, 1975. Print.
- Wadlington, Warwick. *Reading Faulknerian Tragedy*. Ithaca: Cornell UP, 1987. Print.
- Webb, Frank J. *The Garies and Their Friends*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1997. Print.
- Weinstein, Philip M. *What Else But Love?: The Ordeal of Race in Faulkner and Morrison*. New York: Columbia UP, 1996. Print.
- Williams, Linda. *Playing the Race Card: Melodramas of Black and White from Uncle Tom to O. J. Simpson*. Princeton: Princeton UP, 2001. Print.
- Wright, Richard. *Early Works*. Ed. Arnold Rampersad. New York: Lib. of America, 1991. Print.